

Title	バイエルン州立図書館蔵『源氏小かゝみ』（巻二）解題・翻刻
Sub Title	
Author	辻, 英子(Tsuji, Eiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2008
Jtitle	三田國文 No.48 (2008. 12) ,p.42- 62
JaLC DOI	10.14991/002.20081200-0042
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20081200-0042">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20081200-0042</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# バイエルン州立図書館蔵『源氏小かゝみ』（巻二） 解題・翻刻

辻 英子

本稿は『三田国文』第四十七号に掲載した（巻二）稿を承ける翻刻である。

本巻には、製本の際に生じた綴じ違いと見られる錯簡が箇所ある。冒頭の「給ひし宮すところ（1オ）・「いせしまゝおもちてしの（1ウ1〜10）の詞は、本来、本文「伊勢へ下り」（18ウ10）と「ひておはして一よとまりて」（19オ1）との間にあるはずの文である。

本文は、第二系統（改定本系）の中でも『源氏小鏡』諸本集成「所収の神戸親和女子大学本（無刊記整版）に近いもので、これについて編者岩坪 健氏は、次のように述べている。

整版は十一種類あり（吉田幸一「絵入本源氏物語考」上『日本書誌学大系』53）青裳堂、昭和六二年）、そのうち本文が最も良いのは、刊記が最も古い慶安四年（一六五二）本である。ただし無刊記本が一つあり、それは慶安四年本と同一版式で、慶安版より古い可能性がある（吉田前掲書、三二七・三四〇頁）ので、本書では無刊記本を翻刻する（七七頁）。

バイエルン州立図書館本に比べ無刊記整版本は、ルビや漢字書

きが多く、挿絵はない。本文異同については、全巻通して後述する。なお、『三田国文』第四十七号の「注（6）」81頁上段3行目（下段5行目「である」）が、歌数は（須磨）までを削除訂正申しあげる。

バイエルン州立図書館蔵『源氏小かゝみ』詞書

給ひし宮すところよりかくてけんし

のおはします御とふらひに御つかひあ

りこれそいせよりの御つかひ

いせしまやしほひのかたにあさりても

いふかひなきはわか身なりけり<sup>㊦</sup>

うきめかるいせおのあまをおもひやれ

もしほたるてふすまのうらにて<sup>㊧</sup>

文なととてすまの事になへて人のいふ

事なり其ことは

まきかねたる文高す所すまへ文書にて見えたり（1オ）

いせしま おもひやれ五六枚にかく事みちのくかみ

しほひのかた ゆふかひなきわか身

うきめかる

いせおのあま

これは宮す所の文ありし哥のことはな  
りかくてその年もくれぬつきのとし  
の春のころかくれ給ひしあふひの上の  
あにのとうの中將のけんしすまへうつされ  
給ひしよりはあさゆふ恋かなしみてかく  
るよのそしりをもしらすふかきつみに  
あたるとてもいかせんとおもひてしの(1ウ)(錯簡)

源氏目録卷之二

- 六 あふひ  
七 さかき  
八 花ちるさと  
九 すま  
十 あかし  
十一 みをつくし井せきや 井よもきふ  
十二 ゑあはせ  
十三 松かせ  
十四 うす雲(1オ)

(遊び紙) (1ウ)

六 あふひ

此卷あふひといふ事一の巻にけんし十二  
まで元服げんぷくのその夜よりやかてひき入の大  
臣のむこになりておはします北のかたを

はあふひの上といふ此巻に源氏の御あに  
朱雀院しゅくわくゑんの一御はらの姫宮かものいつきに  
そなはり給ふ御もとに源氏はその比大將に  
てつかうまつり給ふそのきしきいみしき  
御ことにて人く目をとおろかす此北のかた  
その比夕きりの大將をはらみにてあり(2オ)  
たゝならぬ御心にてわつらはしくおはし  
ませは御心なくきみにもとて出て御らん  
するに又けんしかよひ給ふ六条のみやす  
所もしのひて出給ふに御車のたてとこ  
ろを御ともの人々あらそひてみやす所の  
御車をうちそんしなとせしなり車あ  
らそひといふ事これなりかものまつり  
の事なればあふひの巻といふ此恨みふかく  
してものけとなりてこの巻に八月に  
あふひ上をとりころす此みやす所へけんし(2ウ)  
しのひまいり給ふこと御門あんのうへも  
しらせ給ひてよにかくれなきにかれく  
なる御心さしのおもはずさを恨給ふ折  
ふしかゝるはちかましき事さへあれはお  
もひにしつみて物のけとなるそれよ  
りけんしいよく御心さしかれくにて  
成ゆくほとに人をも世をもうらみはてゝ  
御むすめの姫宮いせの齋宮に下向あ  
りしにひきつれて伊勢の齋宮にく

たり給ふ伊勢のみやす所ともいふへし(3オ)  
其ことは

あらそひの車 ねたむ

はれぬ かすならぬ

なといふは此みやす所の事なり句にした  
かふてつくへし又かもの祭にかみそきと  
いふ事あり是はまつりの日むらさきの上  
と一車にて御覽しに出給ふか御くしの  
打たえなかく見えさせたまへはこよみ  
のはかせにときとはせ給ひてむむらさ  
きの上の御くしを源氏そかせ給ふかもの(3ウ)  
まつりにかみそきといふことをはこれと心え  
へし御くしそきはてゝ千尋といはひ  
て御哥けんしよみ給ふ

はかりなき千尋のそのみるふさの

おひゆくすゑはわれのみそ見ん<sup>㊦</sup>

とよみ給ふ此返事むらさき

千ひろともいかにてかしらんさためなく

みちひるしほののとけからぬに<sup>㊧</sup>

とよみ給ひしなりこれらのき四月賀

茂のまつりをはみあれともいひしかやうの(4オ)

御うたなどをひきあはせてことはに

そへてつくへしさるほとにかのあふひのう

へ月日かさなりて御産ちかくなるみや

す所のふかき御うらみなれはなにゝを

ろかならんや御なやみ大事にてかきり  
のさまなれはさまゝのいのりかちおも  
ひやるへしそのおりみやす所なのりいつ  
る也このあふひのうへの御かたにもこま  
をたきけるにけしの香みやす所の

御そにふかくしみしこそおそろしかり(4ウ)

けれさてとかくしてわかきみ生れた

まふこのほと御こゝろつくしにいふか

きりなくよろこひのゝしりみな人ゝ

もうちやすみすこしこゝろゆきてわか

きみの御もてなしに日をゝくるほと

に御うふやに廿日はかりありて御はゝ

あふひのうへつゐにかくれたまふおりふし

秋のちもくなれはけんしのきみもちゝの

おとゝも内へまいりたまふこれそかきり

なりけるまかり申にけんしおはしまし(5オ)

てこまゝとちかたらひ出給ふにつね

よりも御めとまりて御らんしをくり

けるとかやあはれなりしことゝもなり

すてにたえ入給ふ内へつけきこえぬれは

そのよの除目もやふれぬあしをそらにて

かへりたまひぬれともかゝるひまをはか

らひたるものゝけなれはかひあらんや

此宮けんしの御をはきりつほのいもと

おとゝはゝ宮けんしのきみの御心のうち  
おもひやるへし八月十五日の事なるをも

しや生かへり給ふとてきながら廿日までを(5ウ)  
きたてまつりけれともかはりゆく事

のみあれはそのかひなくしてつゐ

にとりへのへをくり給ふそのほとんことは

ひとりね 　かたみのこゆふきりの事

しのふくさかたみの事にはめる御そ

けんしふくをぬき給ふ

これはわかれの義にて候へは秋のわかれ

の句などに付給ふへし四十九日すきて

わか御との二てうのあんへかへり給ふ御年

十二よりいまたいとけなかりし御程より(6オ)

そかしすみなれ給ひしに北のかたかくれ

給へはなにゆへにかの大臣の御もとにす

みたまふへきなれはわか君をは此との

にとゝめたてまつりてわかとのへかへり

給ふおりふしのあはれさいはんかたそな

き十月の事なれば時雨ふりあれて

いまさら御なみたをもよほすおほいと

のをはしめたてまつりて日ころ宮

つかへなれし女房なと心おさめやら

す袖をしほる源氏の君もたちさ(6ウ)

りかたく御名こりかなしくおほしめし

なからなくくかへり給ひてむらさき

の上の御かたへわたり給ふしはしの程に

いみしくさかりにねひとゝのひてうつ

くしく見すてかたし此むらさきの  
上十のとしよりもてそたて給ひし

かともいまたおきなくおはします上この

姫君もけんしのわか物とおほしたるとは

ゆめくおほしもよらてすくるほとに

その御としては十五ある夜むらさきの上に(7オ)

新枕ありてつきの夜けんしの御心しりの

これみつをめしてのたまふ事ありこよ

ひはるのこのいはひなりあすの夜かやう

のもちいかすく<sup>う</sup>にありてしたゝめて

まいらせよとおほせつゝ<sup>う</sup>これみつうけ給

はりてねのこはいくつかつかうまつるへく

候らんとゝひ申しかはけんし三か一に

てあらんかしの給へは心えて立ぬ君

ものなれのものやとこれみつを心ま

さりしておほしめしぬ是等はけしから(7ウ)

ぬひじと申ともしるす此心はにる枕いぬ

の日つきのよゐの日にて三日のよかねの

日にあたれり大かた男女のあひそめて

三日の夜はふんく<sup>く</sup>にいはいはふなれば御いはひ

有へきにあふひの上かくれ給ひて帰り

給ひたる折ふしなれはことく<sup>く</sup>人の

おもふへきをはかりてことさらはかりの

義にてこれみつに忍ひやかにの給へり

それを心えてなにととひたてまつ

るへきならねはねのこととひたてま(8オ)

つる三か一とは三はいを一せんにすへてつかのくちにはしをくはへさせていたす物

なればけしきはかりに三か一にてあらん

かしとの給へりおもしろかりし御心のうち

そかし扱つきの夜したてゝもちてま

いり小納言(マ)のめのとゝ聞えしはむらさきの

上の御めのとなりそれはおとなしくて

はつかしくやおほしめすへきとおもひ

てむすめの弁の君といふをよひて

参らせたりつきのあしたとりいたす(8ウ)

おりふし御めのとなとしりて御心さし

の色をあはれにもめてたくもこそ

おもひけれそのほとのこと

三か一　　みかのよのもちゐ

ねのこ　　にあまくら

これらはちきりそめしなとゝいふ句につく

へしむらさきの上御とし十五のころ十

月けんし廿二の御としなりよくゝ

心えへし(9オ)

(絵一)(9ウ)

## 七 榊さかき

此巻さかきといふ事は哥に六条の宮す

ところ

神かきはしるしのすきもなきものを

いかにまかへておれるさかき⑧

心はあふひの上の巻に聞えたる六条の

宮す所の御むすめのさいくうにいせへ下

りたまふにまつきよまりしてのゝ宮

にすみ給ふ所へさすかにわすれもはて

すうきなからいせまで下り給ふなこり(10オ)

もおしくおほしてころは九月七日八日の

夕月夜はなやかにさし出てよろつ物

あはれにておほしめし出てあしるの

くるまのしのひやかにうちやつれたる

さましてかの野の宮へけんし参り

給ひて御覽しければる中めきたるし

はかきを大かきにしてくる木のとり

るかみさひてあたちか原もかれゝに

吹しほれたる松風秋イ身にしみてむしの

こゑもまかひものゝをとたえゝ聞え(10ウ)

てひたきやはかりかすかにて人すみたる

けしきもせずゝにものおもはしき

人のすみてさそおもひのこす事なく

おはすらんとよそまで思ひやりし

よりあはれにてこのほとのとたえをわ

れなからうらめしくおほして御まへの

榊をいさゝかおらせ給ひてみすのうちへさし

いれて物かたりなとし給ふおりの哥

そかしそのゆへにさかきの巻といふさて  
さま／＼の物かたりあかつき近くなりし (11オ)  
かはかへり給ふ其言葉

秋の草かれ／＼

むしのこゑ  
しはかき

ゆふつくよ

くろ木の鳥居

野の宮

松むし

あたちかはら

あかつきのわかれ

やそせのなみ

いせまで

すゝか川八十瀬の波

是等はのゝ宮いせなどに付へしいかにも  
旅のそら物うき事あかぬわかれの心ねを  
いせによそへて付へし扱院の御なやみ (11ウ)

神無月に成てはいとをもく此巻に御門

十一月にかくれさせ給ふ其比より源氏は事

にふれて物うくおほしめして常にわか

殿御かたの内にもむつましく成ゆきて内

侍のかみのことを此巻にあらはれて終

にすまへなかせ給ふ此事此巻にあ

れはとていせなとに付へからす桐つ

ほの御門いつれの巻に崩御ほうごなりける

やらんなど人のたつねんにしらさらんは

むけなれは書しなり (12オ)

(絵二) (12ウ)

## 八 花散里

此巻はなちるさとゝいふ事

たちはなのかをなつかしみほとゝきす

はなちるさとをたつねてそとふ

といふ哥のゆへになりけんし中川の

あたりへしのひておはしましゝ道にて

御らんししりたるとこありける扱こ

の哥をよみて入給ひしなりそのことは

五月雨の空にかたらふこゑ

たちはな やとのかきね (13オ) (錯簡)

これらはみな／＼さみたれのころなれはほ

とゝきすにも

たちはな

にも

つくへ

し (13ウ)

(絵三) (14オ)

## 九 須磨

これはけんしの御あに朱雀院御くらゐの時

はなのえんにあひそめしおほる月よ

の内侍のかみのこと御門のさしも時めかせ

給ふないしのかみをけんしをかし給ふと

聞えてうちの御はゝ大に御腹ごはらたち給ひ

てあしきさまにいひすまへなかし

まふにより須磨とはいふなり此は三月

廿余日なりそのことは

かたみのかゝみ おもやせたる(14ウ)

はしらかくれの面影 さらぬかゝみ

あかつきかけて出る月

これらは須磨へおもむき給ふ折なりむらさ

きの上に御名残おしみ給ひしおりの

ことはなりまことにこのなごりさこ

そおはしけめおさなくよりおほし

たてゝ父はゝになりてもてなしそ

こはくのなかに心さしならふかたなく

おほしめして近き<sup>〔た〕</sup>ころはかりそめ

よもとのみ<sup>れ</sup> たにもなかりしにいつ(15オ)

の月日をかきるへき御わかれならねはせん

かたなくおほしめしつみ給ふに御鏡<sup>きやう</sup>た

いによりゐてひんかき給ふとて此ころの

おもひにおもやせ給へはわれなからなのめな

らすうつくしくおほしてこのかけの

やうにややせて侍るあはれなるわさかな

とのたまへはをんなきみなみたをひと

め うけて見をこせ給へるとしのひ

かたし

身はかくてさすらへぬとも君かあたり(15ウ)

さらぬかゝみのかけははなれし<sup>⑧</sup>

とよみ給ひし返事むらさきの上

わかれてもかけたにとまる物ならば

かゝみをみてもなくさめてまし<sup>⑨</sup>

とよみかはし給ひしことはなりかたみ

のかゝみすまのわかれなどに付させ

給ふへし須磨の巻にはかまいらと云

事を人尋る事あらはあらかふへからす

なかされ給ふ御いとまこひにこるんの御

はかきたやまへまいる給ふちゝのみかと

の御はかなり扱すまへうつろひてみやこ

にひきかへかすかなる御すまゐをし

はかるへしところは行平の中納言のこの

浦になかされてもしほたれつゝとよ

みけんところ近きほとなれはなみこゝ

もとにたちくる心ちしてせんかたな

くあはれなりかりそめのいゑゐまて

もいやしかりしかともあたりおかしく

とりつくろひてまつのはしらたけ

のかきいしのはしらなとやうかはりて(16ウ)

中くおもしろし庭の草たていしき

くらなとほりうへて時のほとみところ

ありてしなさせ給ふそのほとのことば

わか木のさくら いしのはし

たけのかき 松のはしら

これらはすまのいゑゐのしきなり又すま

にしはといふことはおはしますうしろ

の山にたつけふりをなにそたとつ



ね給へはしはといふ物折くふるけふりな  
りと御らんしなれすめつらかにおほし(17才)  
めして

山かつのいほりにたけるしはくも

ことゝひこなんこふるさと人<sup>⑧</sup>

とよませ給ふもしほやくけふりにまかふな

とゝつけさせ給ふへしやうくゝなか雨の

ころになるこれすまになか雨といふ

ことはなり心うへしかやうにとりしつ

めて京へ御つかひをしたてゝのほせ給ふ

ところくゝの返事見給ふにもいかはかり

かは御なみたまよほし給ふこれらはこと(17ウ)

はにつくしかたし扱秋にもなりぬさ

らてたに秋はものうき夕くれに心を

すますたひねのとこおもひやらん

かたなし露ならてたれにとはれぬ

ひとりねのよものあらしをきゝしに

にも波<sup>なみ</sup>こゝもとに立くるゝちす行平

の中納言のせきふきこめるとよみけんも

おほしめしあはせてなみたおつとは

おほえねとも枕うくはかり也宮古より持

たまひしきをひきよせて御心のまゝ(18才)

にひきすまし給ふわれなからすこくおも

しらくおほしてそのほとんことは

ともちとり 月のかほ

ねさめのとこ よものあらし  
うらなみ たちくるなみ  
なみたにうく枕

これらはみなすまのうきすまるのしきな  
りいかにもすまにはみやこをこひしのふ

ふせひうきなたちしなとゝいふことを

つくへし扱もさかきの巻に伊勢へ下り(18ウ)(錯簡)

ひておはして一よとまりて詩れんぐ

哥よみ給ふ夜明ぬれはなくくゝかへり

給ふけんしなつかしくめつらかにて御

かたみとてくろこまふ多なとたて

まつり給ふその程のことは

おなしなみた 雲るにひとり

くろこまふ多 なみたそゝく

はなのさかつき

これらはとうの中将のおはしたるとき

の事なりなつかしくあかぬ名残めつらし(19才)

きにとゝめかねたるなみたのふせひつく

へしあはれにありかたき心さしには

これを申なりかくて其年三月一日

みの日の御はらへし給はんとてけんし

海つらへ出たまふにはかに雨風ふひて

うみの面はふすまをはりたることし

そのほとんことは

ひちかき雨 人かた

みの日のほらへ 大海原

さてやうくとしてたひの御 (19ウ)

所へかへり給ひたればなをも雨風やま

すかみなりひらめきわたりをそろし

き事かきりなし日数をへてふれば

みやこよりしよくの御つかひも参りけ

りぬれそほちてくたるつかひなと

いふ事有へし此つかひあかしの巻に

見えたり哥もおなし巻にありそ

の時むらさきの上の文の御うた

うら風やいかにふくらんおもひやる

袖うちぬらしなみまなきころ㊦ (20オ)

とよみたまひしなりしよくより

ありし文の事なかしくてかす

つるたちより十三日までは雨をやみも

なくふりて十三日のおかつきおはしま

すらうにかみなりおちかゝるあさまし

なといふはかきりなしその時すみよし

の神をふかくきねんして御ころのうちに

くはんともありしやらん雨風しつまり

て空もみどりの色になりしかは

すこしまとろみ給ひたるに御夢のつ (20ウ)

けありちゝこゑん

御てをとりて  
このうらさり

給へとのたまふ

なりされはゆめ

といふ事も

つくへ

し (21オ)

〔絵四〕 (21ウ)

十 明石

此巻に源氏須まよりあかしのうらへうらつた

ひ給へはあかしの巻といふへしかの十三日の

あかつきおきのかたへむかひ夢さめて御

らんしやりたればちいさき舟にのりて

はりまのさきのごくししほちこれをあ

かしの入道といふなりかの人のもとより案

内申てけんしをよひたてまつりて御

むかひに舟をたてまつる此君ゆめうつゝ

おほしめしあはせてさうなくこのうらへ (22オ)

うつろひ給ふ入道よろこひかしこまりて

かきりなくいつきたてまつるそのことは

むかひのふね をひかせ

はいわたるほと ふなて

うらつたひ うらよりをち

これらはあかしへわたり給ひし事かくて

都の御すまゐにもことならずまはゆ

きすちはまさりてかゝやくほとなり

せんすいたていし池のやり水めもお  
とろくはかりなりふる里の池水おもか (22ウ)

けみゆるなといふことはあり事によ  
りてつくへしこれは三月なり程なく四  
月になればころもかへの御しやうそく  
御丁のかたひらかへしろまであらため  
てまはゆきほともてなしかしつき

たてまつる此入道いみしくかしつく  
むすめ一人もちたりこれそわかむらさ  
きの巻にわらはやみのおり北山にて

人々かたりいたし候むすめなるつねに  
おもひこひとりこなとつくるは此事 (23オ)

なり心えさせ給ふへしなへてならすお  
もひかしつきてなへてならんむこをは  
とらしとおもふにかのひかるけんしすま

にしつみ給ふを聞いていかにしてかは  
こゝもとへうつしまいらせてむこにとり

たてまつらんとおもふ心をすみよしの  
神のあはれとやおもひ給ひけんとし月  
すみよしに祈り聞えきすまにてけん

しの御らんしけんゆめとおなしやうに  
かの入道も夢を見てとりあへす御むか (23ウ)

ひをまいらせけりされともいかにしてかいひ  
出すへきとつゐてをまちけるそいと  
るけき心ちせしある夜けんし都の事

二条院のむらさきの上の事よりはしめ  
かすくおほしめし出て物あはれなれ  
は琴をひき給ふ入道たへかねてみつから

しやうのことをもちてまいりてすゝめ  
たてまつるにすこしひきすさひ給ひ  
てこれは女房のひきたるこそにつかは

しけれとの給ひしことはをたより (24オ)  
にしていひよるたとへは此むすめひは

しやうのことなとたくひなくひきければ  
此ひはことをひかせたてまつらはやと  
申いたしたりしよりけんしもゆかし

くおほしめしてつゐに文なとかよふ  
そのことは  
くるみいろ こそみ

うすゝみ かすめしやと  
をちこち をかへのやと

なとゝいふ事ともあかしといふことにつくへし (24ウ)  
このをかへのやと入道のむすめすませ  
し所なりおやのもとよりちとひきへ

たてゝをきたりさてとかくいひよりて  
かよはせ給ふ馬にてかよはせ給ふにある  
夜都もこひしくおほしめしてけんし

秋のよのつきけのこまよわかこふる  
雲井をかけれ時のまもみん<sup>㊦</sup>  
とよみ給ひしなりさてこそ月毛のこ

まなどゝいふことはあかしによし又あかし  
にくるまといふ事ありといふともあらかふ (25オ)

へからするなかなれはあらしなとゝお  
もふへからす入道くるまつくりてもち  
たるとあり扱このむすめ六月のころよ

りたゝならずなりたりしを御らん  
しをきて八月に都へめしかへされ給ふ

此うらには三月より次の年の八月まで  
おはしますすまあかしの二うらに二と

せなり三とせのわかれといふは是なり  
三とせのたひともいふへし扱かへりの

ほり給ふにみやこのわかれにもをとらず (25ウ)  
おほして

みやこいてし春のなけきにをとらめや  
としふるうらをわかれぬるあき<sup>㊦</sup>

とよみ給ひてなくゝ都へのほり給ふかの  
むすめのこゝろのうちおもひやるへし入道

も御なこりおしみたてまつりさかひま  
て御をくりにまいるけんしもかたゝ

あはれに見すてかたく都のわかれにも  
をとらずなとや心から物おもふらんと身

をうらめしくおほしけり扱あかしの (26オ)  
上をうきたひのすまゐにもち給へる

事をいかに都におもはず聞給ふらんと  
おほして人の口よりもれぬさきにとおほ

しめしてむらさきの上の御もとへおもひ

よらぬゆめをこそ見て侍りつれうらな  
きはとはずかたりと思ひゆるし給へと

のたまひて御哥に  
しほゝとまつそなかるゝかりそめの

見るめはあまのすさひなれとも<sup>㊦</sup>  
とよみてをくりたまひしなりこれをと (26ウ)

はずかたりといふなりむらさきのうへ  
うらなくもおもひけるかなちきりしを

まつよりなみはこえし物そと<sup>㊦</sup>  
此哥なとをとり

あはせてつけ  
させ給ふへ

し (27オ)  
〔絵五〕 (27ウ)

十一 漂漕みをつくし

此巻をみをつくしといふ事は  
かすならてなにはのこととかひなきに  
なにみをつくしおもひそめけん<sup>㊦</sup>

此哥ゆへなりけんし都へめしかへされて  
ほとなくもとの御くらゐにあらたまり

かすより外の権大納言になり内大臣かけ  
給ふいみしくさかへ給ふほとにすまにて

かみなりおちかゝりたる夜の御ゆめのさ

としもさま／＼すみよしの神の御ちか(28オ)

ひとおほして秋のころすみよしへ参り

給ふ折ふしかのあかしの御かたもはる秋こ

とにおさなくより御おやいたし立てす

みよしへまいらするにみやこよりもよそ

ほひいみしき躰にて参給ふをもしらす

してあかしよりもまいりたれば松原

のあたりに御車たてつゝけていみし

きさまなればたれかまいり給ふそとな

にはに御舟さしとめやすらひとはせ

給へは内のおとゝ参り給ふといへはこと人(28ウ)

よりもはつかしく数ならぬ身をおもひ

てなにはのはらへはかりてかへらんと

するにしのひやかに人しらせければれいの

御心しりのこれみつ御車ちかく参り

てかくと申ければわひぬれはとくち

すさひ給ふ此御心は本哥に

わひぬれはいまはたおなしにはなる

みをつくしてもあはんとそおもふ<sup>Ⓢ</sup>

といふ哥の心をたまひしかはもし御よう

もやとてつねによういしてもちたるつか(29オ)

みしかき筆御すゝり出して御車の内へ

たてまつるたゝうかみにけんし

みをつくしこふるしるしにこゝまでも

めぐりあひぬるえにはふかしな<sup>Ⓢ</sup>

とよみてかの御舟につかはすされはみ

をつくしといふ事はすみよしめぐりあ

ふなにはの舟なといふことを付へし

さて此巻にあかしのうへは姫君三月十

六日にうみたてまつり給へは京より

御めのとくたさるゝそのことは(29ウ)

いはのをひさき いか 五月五日五十日御あり

ときそもなきかけ

これらはかの姫君のうまれ給ひし時分

の事と

こゝろへ

へし(30オ)

〔絵六〕(30ウ)

関屋 みをつくしのならひ

此巻せきやといふ事けんし石山へまいり

給ふにせき山にてむかしうつせみと聞

えし人のおとこのいよの介ひたちの国司

になりて下りしかかはりて後京へ

のほるにせき山にてあひ給ひしか

は人しれすむかしの事をおほしめし

出て石山より出給ふ御むかへにこきみ  
まいれりしのひてむかしの御心しりの  
こきみをめして御文あり其ことは(31オ)

せきや し水 ゆきあふみち

しほならぬうみ せきとめかたき涙

そのおりのことはなりこれをとりあは  
せいし山せき山などに付へし

わくらはにゆきあふみちをたのみしも

なをかひなしやしほならぬうみ<sup>㊹</sup>

ゆくどくとせきとめかたきなみたをや

たえぬしみつと人はみるらん<sup>㊺</sup>

けんしまいり給ふうつせみは都へ入ぬれは  
ゆくどくるとの心なりわくらはとは(31ウ)

たまゝの

こゝろなり

これは

あふさか

山なと

に

つくへ

し(32オ)

〔絵七〕(32ウ)

蓬生<sup>よもぎ</sup>  
みをつくしのならひ

此巻よもぎふといふ事はわかむらさきの

まきのならひすゑつむ花の巻に見え

たり見めわろくはなあかき女房ためし

なかりしはひたちのみやの御むすめそ

かし源氏あはれみてしはし立よらせ給

へともすまのたかひめなどにはおほし

めしもかすへさせ給はすされともちゝみ

やの御あとのかれはてしと御心をたえ

ていふかきりなくかすかなる御すまゐ(33オ)

にてすみ給ひしをすまよりかへりた

まひて花ちるさとの御かたへ五月はかり

のころわたり給ふにさみたれの露ふかく

よもきむくらしけりふるき家ありこ

れそひたちのみやと御ともの人申すさ

ることくおほしめしいてゝわけ入給ふ

にしきりに露しけゝれは御かさをさ

しかけて御ともの人むまのむちに

て露うちはらひて入給ふそれよりあは

れみ給ふにはの草をもひきのけところ(33ウ)

くつころはせなとして二三年あ

りて二条のゐんひかしのたいにうつ

してふちしたてまつり給ひしなり

すへて御心かたくなにくちはさしいて

はみかたはらいたき事おほかりし

人なり其時の御哥そかし  
たつねてもわれこそとはめみちもなく

ふかきよもきのもとのごゝろを42

よもきふには

むま 　　むち(34才)

かさ

ふくろふ 　　あれたるやと

きつねのすみか

なといふ事もありつくへしこたまもすみぬへしなとゝいふ事もあり又よもきふすゑつむなとにかつらといふ事人いひいたしたらは心うへし此すゑつむの女房のめとなりしか侍従とてすゑつむにはまさりてけんしなとの文の返事とも申す人かましくありしをすゑつむの(34ウ)

御ためにはしたしかりし人つくし大忒になりて下りしおりこひたてま

つりてしも侍従もたとへなき御あり

さまなれはさそふ水あらはとおもひし

ほとに姫君をうちすてたてまつり

てくたるに御くしのおちにてかつらを

してもち給へるいとうつくしくて九尺

はかりなん有けるを御かたみにとて

侍従にたひしなり此事

心えへし(35才)

〔絵八〕(35ウ)

十二 あはせ 絵合

此巻ゑあはせといふ事そのころのみか

とはけんし藤つほの宮の御はらにしの

ひていてき給ひし宮にておはしま

す後には冷泉院と申此宮人めには

きりつほのみかとの十にあたり給ふ

宮にてことのほかには御いとをしみに

ておはしましゝかは御くらゐにつか

せ給ふかの朱雀院にはおとなしき宮も

おはしまさすみをつくしの二月にとう(36才)

くうはかりそいとおさなくおはしまし

ける此御門のみよには源氏よろつをは

からひ奉り給ふむかしのあふひの上の御

ちゝ左大臣とのせつしやうをもたせ給ふな

に事も御心のまゝにてめてたし御

孫のひめ君こうきてんにさふらひ給ふ左

大臣殿の御まこなりちしのおとゝのむ

すめなりみをつくしの八月におなし

くゑあはせの君なり又けんしのかよ

ひ給ひし伊勢の宮すところの御はら(36ウ)

のさいくうに立給ひしもおりさせ給

ひてけんし此さいくうを御子にしたて

まつりて内へまいらせ給へはとりくの御

おほえにて梅つほと申後にはきさき

にたち給ふみかたよろつ御ことより

もゑにこのませ給へははうくうちあつ  
めまいらせ給ふころは三月十日ころなれば  
大かたのそらもおもしろき比こうきてん  
と梅つほとさうをわかち御ゑあはせ有  
てみかと御らんありせいりやうてんのひ (37オ)  
ろひさしに御座よそひて内の御かた

わたらせ給ふ女御たちの御たいくはんには  
女房を三人つゝ出されたり心ことにさう  
そきてさふらはるゝ兵部卿の宮かんつけ  
の御こなとのはんし給ふくちくくにいと  
みしにひたり梅つほなればけんしの  
御かたよりすまあかしの二のゑを取  
出されたりこれによりひたりかちた  
まふさてゑあはせといふ此すまあかし  
の二のゑはすまにおはしましゝ時た (37ウ)  
とへなき御つれくゝのあまりに色々の  
かみにうらのけしき山のたゝすまゑを  
御心のゆくくゝかきすまし給ふそれに  
わか御有さまをかき給へはいかてかを  
ろかならんとへむかたなしこれを  
心えて付させ給へ此御ゑをはわか物な  
からあまりにひしてみやこへもちて  
のほり給ひてもむらさきの上になたにも  
みせたてまつらす此ときけうに出さ  
れたりされはむらさきの上の三のう (38オ)

らみといふ事の二に此ことほりなりと  
心えへし一にはあかしの上のかたへの文の  
上つゝみを見せ給はぬ事一にはきぬく  
はりにあかしの上にはしろきゝぬを  
まいられし

事以上三

なり

〔絵九〕 (39オ)

十三 松風

此巻まつかせといふ事けんしのあかし  
にて御心さしあさからす入道のむすめ  
をおほしめしてたゝならさりしを御  
らんしすてゝのほり給ひしを御ひめ君  
うみたてまつりてとかく月日すきて  
三になり給ふあまりにさかひへたゝり  
たれはおほつかなく恋しくおほしてか  
のうらより京へのほり給へとの給へは大  
そのすまゑ先しはしはむつかしと (39ウ)  
てかあかしの上の母入道の北のかたの  
おほるかはそのわたりにしるところもち  
たれはそのあたりの物ともよひよせて  
ふるき家なんとしゆりせさせてのほり

(38ウ)



すみ給ふとしころのおとこをは此浦  
にすてゝむすめをつれてのほりた

まふにうたうは北のかたむすめに打  
すてられ又二三年かほと袖の上の玉の  
やうにもてなしかしつきなしみた

てまつるひめ君にもはなれたてま(40才)  
つりわか身としよりたれはいつのよにか  
あひ見たてまつるへきとなこりのかなし  
きたとへもなしされともみやこへのほ  
り給へはめてたくおもふさておほ井に  
ゆきつきたれはそのあたりなれば川な  
みすこく松風ふきはらひてふるさとゝ

しもおほえすさひしければあかしを  
けんし出給ひしおり都よりもたせ給  
ひしことをあふまてのかたみとてを  
き給ふをとりいたしてひき給ふ(40ウ)

身をかへてひとりかへれる古さとに  
きゝしににたる松かせそふく④  
とよみしゆへなりそのことは

都にかへるかたみのこと まつ風  
おほ井川

なとゝいふ事をつくへし扱その比源氏か  
つらに御堂をいかめしくたてゝ月に二  
度念仏などのためにおはしけるつゝ  
てに大井へもわたらせ給へは月に二度

の御ちきりなとゝ也あかしの上はおほ井(41才)  
に住しなりのわたらせ給ふを源氏みな人かつら

にすむと心えたり能々心え分て付給へ月  
に二度のちきりは大井かつらに付へし  
姫君三にて登給へはひるこのとしとまつ

かせ大井に付へし又此巻に小たかゝり  
といふ事ありこれは秋のころけんしかつ  
らへまうて給ひてれいのことくおほるに  
おはしける時わかき殿上人君たちあまた  
小たかかりのつゝるに参りたれば  
みきなとまいりて月おもしろきあた(41ウ)

りなればあそひ給ふ小たかゝりして  
こ鳥ともをおきの枝につけたりとあ  
るをうるはしきおきと心得へからす  
ちいさき木のえたと

心えへしこれは  
かつらおほるに

付へ  
し

(絵十)(42ウ)

十四 薄雲うすくも

此うす雲の女院と申は藤つほの事かゝ

(42才)

やく日の宮と申はけんしのけいほしの  
ひて参りたまふる人なり此巻うす雲  
といふ事うす雲の女院かくれさせ給  
ひて後けんしよみ給ふ哥

いり日さすみねにたなひくうす雲は  
物おもふ袖に色やまかへる<sup>④</sup>

此哥の心はかやく日の宮と聞えし藤

つほのみやそのころ主上はけんしのしの (43才)

ひてこの御はらにまうけ給ひしみか  
なれとも故院ゆめにもしり給はてこと  
の外御いとおしみにて御とし十一にて  
みをつくしの巻に御くららみにつかせ

給ふ御母かやく日の宮も中宮より女院

のせんしかうふらせ給ひてめてたし

御とし三十七にてかくれ給ふころは三月

の事なり天下涼園りやうゑんなり御門をはしめ

たてまつりて御敷みせのいろふかしとり

わけけんしの御心のうちおもひやるへし (43ウ)

大かたよのはかなきをたにも御心ふかく

おほしなげかせ給ふ御心なれはまして

わずれぬむかしの御心つくしなれは

今は此よの名残たにもなき心ちし

て人めには大かたの事にて御心のうち

はおもひやるへし

ふかくさの野へのさくらし心あらは

ことしのはるはすみそめにさけ<sup>④</sup>

なと花にひとりかこち給ひてなかめ

給ふ夕くれの空そこはかとなくかすみ (44才)

わたりてゆふつく日のさすにまかせて<sup>みね</sup>峯

の雲のうすみなるやうにてわか御袖

の色にまかひければよみ給ひしなり

さてこそうす雲のまきとは申此女院

をもうす雲の女院と申つたりさ

れはうす雲とあらはゆふくれの袖の

色かやくひかりかくるなといふ事を

つくへし又此巻にてんかにさとしし

けく月日のけしき雲のたすま

るまでもふしきなる事とも有し (44ウ)

ほとに大やけもおほしめしなげか

せ給ひて御祈りともさまくりにありし

に此女院の御をちにておはしますそ

うつ大やけの御持僧にて夜居にまいり

給ひしか人のきかぬまにかのけんしの

君の御こにておはします一切きの事親

のをんよりおこる事なれはおやをしろ

しめさて御らんしくたさせ給へはその

ゆへにかやうに天下をたやかならずと

申きかせ侍れはみかと大におとろき (45才)

思めしてその色をけんしにも申されて

たくららみにつき給へとおほせられ

しかともいかゝさる事侍らんと申てた  
かひに御心のうちには御心え給てその  
のちそ御世もしつまりけるその御心  
のをりにて此みちにけんし三十九の  
御とし藤のうらはの巻に院号かうふら  
せ給て六てうのゐんと扱こそ

申けれ(45ウ)

(絵十一)(46オ)

十五 あさかほ 権

此巻あさかほといふ事けんしの御哥に  
あさかほのさいゐんとて式部卿の宮の姫  
君かものいつきにておはしゝかおりゐ  
させ給ひてせんさいのゐんと申かの御かた  
への御哥

みしおりの露わすられぬあさかほの

はなのさかりはすきやしぬらん<sup>④</sup>

とよみてたてまつりしゆへにあさかほ  
の巻といふなりさいゐんかものいつきに  
ておはしましかものいかきのうちまて

も御心にかけて申かよはせ給へとも折  
ふしの御情しき御返事なともにくから  
す聞えさせ給へともつゐに御心つよく  
てやみ給ふおりになりては御おはの  
もゝそのゝ宮にひとところにすみ給ふ

なりそのことは

あさかほ

もゝその

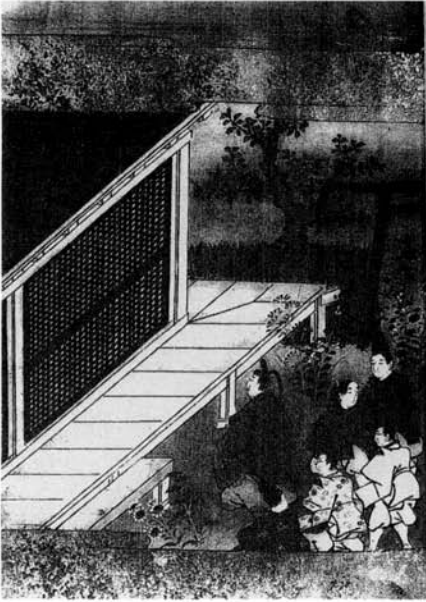
なとゝいふ事につけへし御心つよきゆへに  
あやにくにやけんし事の外におりたち(47オ)  
申給ひしかとも御心つよくてのちに  
つゐに御くしおろし給ふ心つよき事や  
さしきためしをつくへし

(47ウ)

(絵十二)(48オ)

付記

本研究は平成20年度科学研究費補助金(一九五二〇一六三)  
による研究成果の一部である。



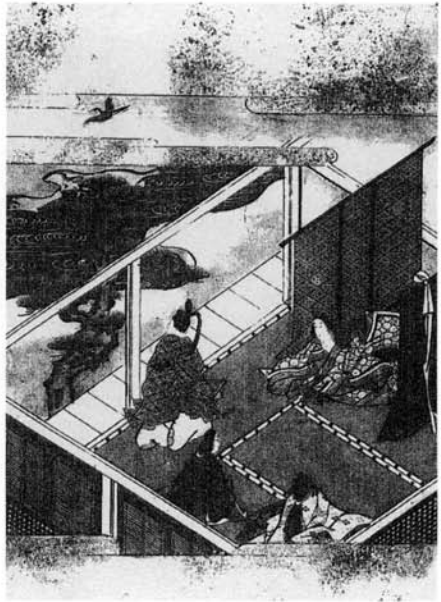
絵二



絵一



絵四



絵三



繪六



繪五



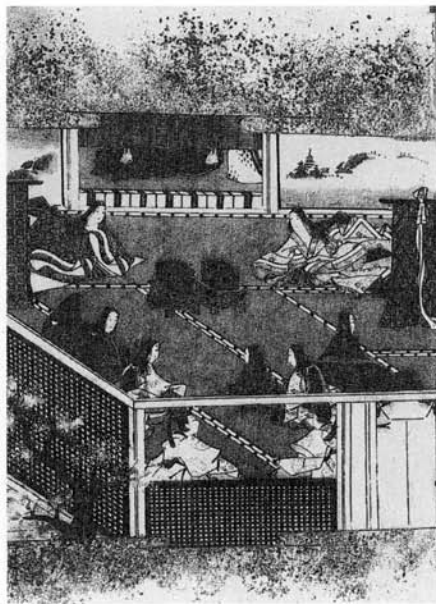
繪八



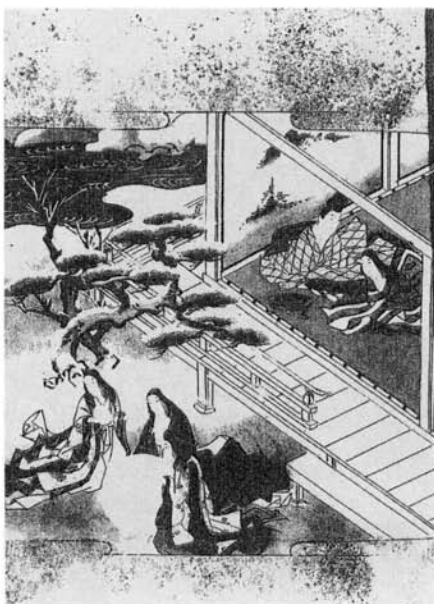
繪七



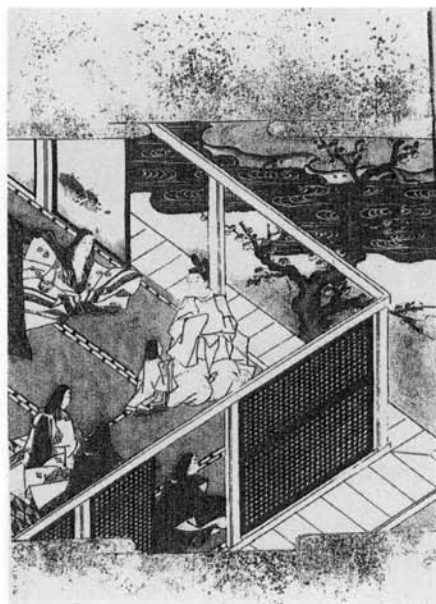
絵十



絵九



絵十二



絵十一